廣瀬川

第90号
平成28年
8月25日

仙台市小学校長会　　発行者／成田　忠雄（会長）　責任者／今野　克則（広報部長）

主張

今一度防災を考える
― 自:共:公＝7：2：1のパワーバランス ―

会長　成田　忠雄（片平丁小学校）

4月14日夜間に熊本県で起きた大きな地震。余震が1か月経過しても収まらず，熊本県では，今まで経験したことのない事態に遭遇した。発災後1週間の時点で8割の学校で避難所が開設され，熊本市内でも，ある学校では千人の避難者であふれていた。学校では校長や教頭が泊まり込みで避難者の対応をし，管理職の健康を心配する声も挙がっていたとか。

まさに，仙台市も通って来た道である。避難所運営について，大西熊本市長は，新聞の取材に「地域コミュニティと市職員が普段からもっと連携ができていたら」と反省を述べたそうである。東日本大震災の教訓が生かされていない。更に言うならば，ブロック塀の倒壊の様子を見るにつけ，37年前の宮城県沖地震の教訓すら生かされていないと感じた。

5年前のあの時，避難所運営に際しては，学校支援地域本部が開設されていたところでは，ほかの地域よりも運営がスムーズだったという文科省の報告がある。支援本部の有無というよりも，普段から地域と学校のよい関係づくりができていたかどうかということが要なのであろう。例えば，夜間や休日に災害が発生すれば，学校職員の対応も遅れる。その時には，市の避難所担当職員や町内会，更に避難者自身が対応しなければならない。鍵は誰が持っている？避難所の備蓄品や資機材の保管場所は？市の担当者は誰？…と，あらかじめしっかりと情報を共有した上で，訓練に臨んでおかないと対応は難しいだろう。また，日中に発災した場合は，我々はとにかく子供の安全を守ることが先決になる。だが，地域からぞくぞくと避難者がやってくる。人道的な立場からも，我々学校職員がその対応をしなければならない。子供のことが優先だからとは言っていられなくなるだろう。校長はその時，子供の対応，避難者の対応と，職員に指示を出さなければならない。一方で家庭を抱えている職員を帰宅させることも考慮しなければならず，シフトを組んで直後の混乱を乗り切っていくことが必要になる。

昨年9月の集中豪雨の際には，夜間である上，道路環境の悪化により職員が学校に駆け付けられない，被害の地域差が大きかったためか，夜が明けて天気が回復し，避難者が引き上げた後も避難所の解除命令がなかなか出ない等，5年前の経験を踏まえていても，やはり様々な課題が残った。

さて，今回の熊本のことにより，いつどこでも大災害が起きる可能性を改めて認識できたはずである。首都直下型地震や南海トラフ地震以外にも，かなりのリスクを想定しておかなければならない。20年前の阪神淡路大震災以降，今や防災の基本理念となった「自助・共助・公助」。学校は，「その時」が来たら，7割の「自助」と2割の「共助」のソフトパワーで乗り切っていける体力を蓄えておく必要がある。

内　容

○主　　張 …… 1
○特集「第12回全国小学校英語活動実践研究大会」 2
○提言「復興に向けた創意ある教育」 …… 3
○学区紹介「地域とともに」 …… 4
○特色ある教育活動 …… 7
○仙台市小学校教育研究会から …… 14
○退会者からのメッセージ …… 15
○新任校長所感 …… 19
○編集後記 …… 20

特集　第12回 全国小学校英語活動実践研究大会

第12回全国小学校英語活動実践研究大会仙台大会を振り返って

佐藤　智則（富沢小学校）

平成28年２月12日，13日の２日間にわたり，東北で初めての開催となる全国小学校英語活動実践研究大会が仙台で開催された。１日目は市内五つの小学校を会場に公開授業が行われ，全国から参加された先生方と活発に意見交換がなされた。東六番丁小学校では宮城教育大学特任准教授根本アリソン先生より，榴岡小学校では琉球大学教授大城賢先生，宮城教育大学教職大学院教授板垣信哉先生より，向山小学校では文部科学省教科調査官直山木綿子先生より，北六番丁小学校では筑波大学大学院教授卯城祐司先生より，旭丘小学校では宮城教育大学准教授鈴木渉先生より御助言いただいた。２日目は，仙台国際センターにて午前は文部科学省教科調査官直山木綿子先生の講演，午後は三つのテーマに基づき分科会が行われた。第１分科会では「“Hi, friends!”を活用した指導と教材の工夫」をテーマに琉球大学教授大城賢先生より，第２分科会では「評価と授業の改善」をテーマに北海道教育大学教授萬谷隆一先生より，第３分科会では「小中連携による効果的な外国語の指導」をテーマに文部科学省教科調査官直山木綿子先生より御指導いただいた。

仙台大会の成果としては，以下の４点が挙げられる。①単元終末のコミュニケーション活動を設定することで，児童に目的意識と相手意識を持たせ，その目標を達成するために“Hi, friends!”を効果的に活用することができた。②評価場面の吟味や評価方法の工夫により，児童同士の関わりや意欲を見取ることができた。③中学校への円滑な移行に関して，カリキュラムの照合や児童と生徒の交流授業を行い進展が見られた。④児童同士の関わりや共助の態度に関して効果を得ることができた。課題として，評価方法・評価場面の吟味を続けていく必要がある。小中連携での授業を推進するために今後の外国語活動を見据えて，中学年部と高学年部の授業のつながりを考えていくことも急務である。今後，仙台大会で出された課題について仙台市全体で知恵を絞り解決していきたい。

英語に慣れ親しみ，進んでコミュニケーションを図ろうとする児童の育成

今野　克則（榴岡小学校）

本校では，今年の２月12日に仙台市で開催された「第12回全国小学校英語活動実践研究大会」の授業校の一つとして，日本全国から150名を超える参会者をお迎えし，第５．６学年三学級の授業公開を行った。標記の研究主題のもとに取り組んできた内容や成果を全国に発信することができた。

事後の分科会では，教師の指導や子供たちの活動ぶりに対し，高い評価とたくさんの称賛をいただき，教職員と子供たちの大きな励みとなった。

取り組んできた内容の中から特徴的な二つの事柄について以下に述べる。

１　三つの授業パターンの提案

当日は，指導体制の工夫に努め，次の三つの授業パターンについて提案することとし，それぞれにチームを組んで，議論しながら授業づくりや授業実践に取り組んできた。

【外国語活動三つの授業パターン】
A　**担任一人**で行う授業
B　**担任**と**ALT**が一緒に行う授業
C　**担任**と**外国語活動専科**が一緒に行う授業

また，授業づくりについては，**「教材の効果的な活用を図った学習活動」と「児童同士の関わりや意欲を見取る評価」**の二点を中心に取り組み，文部科学省の直山調査官等の御指導・御助言もいただきながら，外国語活動の有り様について探ってきた。

２　「ショート　イングリッシュ」の実践

毎週金曜日の朝の時間帯に，英語に親しむ時間として「ショート　イングリッシュ」を設定した。3，4人の教師がチームを組んで，ゲームや歌，発話などを，放送を通して行った。内容に応じて小道具の準備や服装にもこだわりながら行ってきた結果，下学年の子供たちもこの時間をとても楽しみにするようになり，英語活動への意欲や関心が高まった。

提言
復興に向けた創意ある教育

地域とともにある学校

第２地区会長　安倍　啓司（八幡小学校）

１　心の教育は「あいさつ」から

本市教育の最優先課題はいじめ防止対策です。八幡小では，日々の授業の充実と学級の生活づくり，人間関係づくりを対策の基本に据えつつ，一つのアプローチとして「心の教育はあいさつから」に力を入れています。顔を合わせ，挨拶を交わす。相手（人）に対して関心を持つこと，相手意識がいじめの未然防止，早期発見につながると考えます。学校の取組として，「八幡っ子の４つの約束」に「心をこめてあいさつします」「されていやなことはしません」を位置付けたり，生徒指導部や児童会が，テレビ放送で呼び掛けたり，朝の「あいさつ運動」を実施したりしています。地域では防犯ボランティア組織「白はとパトロール隊」の協力があります。子供たちの元気な挨拶に，褒め言葉を添えて返してくださいます。「あいさつ」は思いやりの心遣いです。心の教育を「あいさつ」という目に見える形にして児童に示し，その取組を保護者や地域に発信していくことで，いじめに対する危機意識を共有し豊かな心を育んでいきたいと考えています。

２　地域防災訓練から

学区の中で，広瀬川沿いの地域が水害・土砂災害危険箇所に指定されています。昨年９月の大雨では，学生を中心に100名程の方が避難してきました。そこで今年６月，本校を会場に水害を想定した青葉区総合防災訓練が行われ，学校も施設管理者として参加しました。改定になったマニュアルでは，避難所担当課と学校が避難所を開設し，初期の運営に当たることになっています。しかし，八幡地区では，町内会の強い希望で，避難所開設時から町内会が全面的に運営に加わる方向で訓練が実施されました。自分たちの地域への愛着と誇り，そして教職員には子供のことを最優先に考えてほしい，地域の安全は地域で守るという強い意志。八幡小はこのような地域（町内会）に支えられています。災害発生に備え，児童の安全を守ることは校長の責務です。今後も地域との連携のきずなを太く強くしていくことが校長の役割と考えます。同時に学校は，防災教育の成果を，児童を通して地域に還元していくという視点を持つ重要性も強く感じています。

提言
復興に向けた創意ある教育

保護者・地域との連携を大切した「市名坂の学び」の創造

第４地区会長　狩野　孝彦（市名坂小学校）

東日本大震災から６年目を迎え，震災避難児童もわずかとなり，震災の記憶が薄れてきているのが現状である。しかし，心の復興については，引き続き取り組む必要があると考える。更には，仙台版の防災教育を行うことで災害に対応できるスキルを子供たちに身に付けさせていくことが求められている。本校では，復興に向けた創造ある教育の柱を『保護者・地域との連携を大切した「市名坂の学び」の創造』として，取り組んでいる。学校を地域に向けて積極的に開くことで，子供の学びの環境をより豊かにするだけではなく，教職員や保護者，地域住民等が共に学び合いながら成長できればと考えている。

保護者や地域住民が主体的に関わり創り上げてきた「市名坂の学び」をより充実させるために，学校支援地域本部との連携を基本としながらも，PTA・学校の森委員会・避難所運営委員会・泉区中央市民センターとの連携をより充実させている。

例えば防災教育で，地域防災リーダーを講師に招き，閉庁時の対応について保護者と共に学ぶ機会を予定している。

地域の人々が集う機会が増えることで，日常的な結び付きが生まれ，学校と保護者・地域の相互理解が一層深まっている。結果として，児童理解の充実にもつながっている。

更に，PTA活動の充実を図ることで，保護者が学び合い，共に成長できる場としていきたい。保護者や地域の人々は「協働」して活動することの楽しさや大切さに理解を示している。

保護者や地域の人々との相互理解や信頼関係をより強固なものにすることで，地域とともに歩む市名坂小学校を確立したいと考えている。このような取組を実践することで，子供たちの可能性を広げる「市名坂の学び」を創造し，一人一人の自己肯定感をより高め，未来を切り開きたくましく生きる子供を育んでいきたい。

提言
復興に向けた創意ある教育

人との関わりを大切にする児童の育成を目指して

第６地区会長　髙橋　克仁（古城小学校）

本校では，十数年前から６年生が輪番で毎日校門や昇降口前に立ち，登校してくる児童に挨拶を呼び掛ける朝の挨拶運動を行っている。

東日本大震災直後の平成23年度，復興に向けて自分たちにできることは何かを考えさせた際，「元気な挨拶で地域の人たちを元気付け，笑顔を取り戻したい」という考えにまとまった。そして，挨拶運動の更なる充実のために合い言葉とキャラクターの募集を行い，合い言葉は「えだまめ（えがおで，だれにでも，まいにち，めをみて）」に決まった。

「えだまめ挨拶運動」は，強化週間には１年生と６年生，２年生と５年生，３年生と４年生が一緒に挨拶当番に立つようになり，広がっていった。故郷復興プロジェクトの時は中学生と一緒に挨拶運動を行っている。

また，本校では，震災の前年から仙台伝承七夕について学ぶ活動を行っている。震災以後は，「自分たちの作品を見ることで地域の人に元気になってもらいたい」との願いを込め，作ったミニ七夕飾りを市民センターや地下鉄河原町駅，ＪＲ長町駅，宮城刑務所などに展示してきた。更に，昨年度は荒浜小学校，今年度は東六郷小学校と，年度末に閉校を迎える同じ若林区の小学校に送った。このミニ七夕飾り作りでは，仙台伝承七夕の会の方々や地域の方々の御協力をいただいている。

本校が属する八軒中学校区（４校）では，９年間で育む子供像を「人との関わりを大切にする児童・生徒」と定めて教育活動を実践している。

東日本大震災から５年が経過し，震災時に在学していた児童は全て卒業した。２，３年後には，震災当時幼かったため震災の記憶のない子供が，数年後には，震災後に生まれた子供が入学してくる。震災の恐ろしさを伝え，自助・共助の力を付けさせつつ，自分たちでも人の役に立てるという経験を通して，人との関わりを大切にする児童を育てていきたい。

学区紹介　　地域とともに

地域を誇れる子供たちを目指して

泉　洋子（馬場小学校）

馬場小学校は，明治９年に温故小学校（現　秋保小学校）馬場支校として開校し，昭和26年に馬場小として独立して現在に至っています。地域の集落は山形へ至る二口街道沿いに形成され，かつては人や物の往来が盛んでした。地域住民のほとんどは代々馬場の地に住んでおり，地域の自然や文化に誇りを持っています。学区は農村の風景で，子供の家庭の多くは田畑を守り維持して生活しています。

このような環境の中で子供たちが地域のよさを知り地域を見直す活動として，本校では秋保歴史探訪会や栽培活動などを行っています。

秋保歴史探訪会は，秋保の歴史に精通する方々を講師として，秋保町内３校の６年生が史跡を巡る学習です。探訪会では地域の歴史にじかに触れることができ，歴史という観点から新たな興味を喚起することで，地域を見つめ直すことができます。

栽培活動では，地域で栽培されている農作物を子供たちが自分で育て，収穫し調理して地域の食文化を学んでいます。３年生は大豆の栽培と豆腐作り，５年生は米作り，６年生はそばの栽培とそば打ち体験を行っています。どの活動も作物の管理や収穫後の調理に関して地域の名人の方々に支援をいただいており，子供たちは名人の知恵に学び，地域のよさに気付いていくことができます。

特に５年生は学校田での米づくりにとどまらず，学区内の田んぼでJA・生産者・温泉旅館組合など地域の諸団体と一緒に秋保環境保全米の栽培活動を行っています。この活動を通して，米作りに対する地域の方々の熱い思いに触れるとともに，環境保全米を栽培することができる故郷馬場の自然環境のすばらしさを実感することができます。更に，昨年度から温泉旅館を訪問して環境保全米に関するインタビュー活動を行い，新たな視点で米づくりの学習に取り組むことができるようになりました。

今後も，学区内にとどまらず，秋保町という広い地域で人や歴史と触れ合いながら地域のよさを学び，地域を誇れる子供たちに成長していくよう，学校と地域が一体となって取り組んでいきたいと思います。

学区紹介　地域とともに

地域の皆様に支えられて

安藤　雄一（中山小学校）

本校は，仙台市北西部の丘陵地にある中山地区を学区とし，昭和43年に開校いたしました。中山地区は，商店街や地域の皆様が大変元気で，地域を盛り上げようと活発に活動しています。また，地域と学校との結び付きも強く，様々な行事や教育活動に対し，地域の皆様から温かい御支援や御協力をいただいています。

１　放課後子ども教室事業「生き生き中山っ子教室」

本校の放課後子ども教室は，文部科学省の「子供の居場所づくり教室事業」をスタートに，今年で11年目を迎えます。現在では，年間延べ4000人もの子供たちが利用する魅力的な教室になっています。お茶やお花などの文化系教室からバスケットボールや陸上などの運動系教室まで幅広く開催し，地域の皆様が先生となり教えてくださっています。また，月に一度，商店街が開催している「なかやま街道市」では，子供たちがお店を出したり，商店街のお店の売り子をしたりしています。働くことの喜びや大切さを実感する貴重な機会となっています。また，それらの活動が認められ，平成26年度には，文部科学大臣表彰をいただきました。

２　とびの子まつり

夏休みには，地域の最大の行事である「とびの子まつり」が行われます。地域の伝統づくりとコミュニケーションづくりを目的に始まったお祭りも今年で42回を数え，中山の伝統行事として根付いています。校庭いっぱいのテントに模擬店や遊びのコーナーなどたくさんのお店が準備され，子供たちは思い思いに巡り楽しみます。本市のコミュニティー祭りの先駆けとして始まったお祭りも，中学生の積極的な参加を得て，ますます地域の力が結集した盛大な行事となっています。

そのほかにも，防犯ボランティアの皆さんによる朝の見守りや学校支援地域本部の活動など，学校生活の多くの場面で地域の皆様から御支援をいただいています。地域の皆様に感謝するとともに，これからも，子供たちの健やかな成長のために，共に支え合う関係を築いていきたいと思います。

学区紹介　地域とともに

地域とともに学ぶ学校を目指して

永井　一也（館小学校）

館小学校は，昭和63年４月１日に開校，泉ヶ岳が望める緑豊かで静かな環境にある学校です。全校児童441名で今年度はスタートをいたしました。

本校は，経済産業省資源エネルギー庁より「平成26年度エネルギー教育モデル校」に３年間（平成28年度まで）の認定を受け，エネルギー教育を通した仙台自分づくり教育の研究実践に取り組んでいます。また，今年度，文部科学省による「平成28年度原子力・エネルギー教育支援事業」による御支援もいただいております。

エネルギー教育は持続可能な社会の構築をめざし，エネルギーや環境に関する諸活動を通して課題意識を醸成し，その解決に向けて適切に判断・行動できる資質や能力を養うものです。子供たちの身近にあるエネルギーをツールとして，ESD（持続可能な開発のための教育）の考え方，仙台自分づくり教育の五つの力の育成等に全教職員一丸となって取り組んでいます。

昨年末には，子供たちが学習の成果の発信として幅30メートルほどのイルミネーションを制作しました。多くの地域の方々に子供たちが心を込めて作った光のアートを鑑賞していただきました。制作した子供たちも，家族と一緒に（光るのは暗くなってからなので）足を運び，地域の方々の反応を見て喜び，自分たちの成し遂げたことに誇りのようなものを感じていたようです。

また，昨年度末に「エネルギー教育賞最優秀賞」に選出されたことは，予想を超えて地域の方々からの賞賛の声をいただきました。学校経営方針の中に願いとして掲げた「地域にとっての学校→誇り・必要性」が一歩前進したような気がいたします。

夏季休業中には昨年度に引き続き，学校と社会学級の共催で，「教職員・社会学級生・保護者・地域の方々」でエネルギー関連施設の見学会を企画しています。子供たち・教職員・保護者・地域が一体となって共に学ぶ，そんな生き生きとした活力ある学校を実現したいと考えています。

学区紹介　地域とともに

岩切～地域の熱い思いに支えられて

丹野　富雄（岩切小学校）

岩切の歴史は遠く石器時代に発し，その遺跡は古墳時代の遺跡とともに，山崎・燕沢丘陵地帯一帯に見ることができます。藩政時代に入ると，伊達家の足軽町としての基礎が出来上がりました。

学区を流れる七北田川は，カムリ川と愛称され地域住民の生活に密着しています。学校の西側を岩切街道が走り，両側の町並みには昔の面影が偲ばれます。東側は，県道仙台松島線・東北本線・新幹線が田園地帯を横切り，発展がめざましい地域です。

それに伴って児童数も増加し，５月１日現在の在籍児童数は，1120名です。今後予想される児童数の増加と仮設校舎解消のために，現在，校舎の増築工事が行われています。

岩切地区は，保護者や地域の方々の小中学校に対する思いが極めて熱い地域です。町内会活動，体育振興会の行事，交通安全協会や防犯協会等の取組などに，児童生徒の健全育成が据えられています。

岩切小学校と岩切中学校は，平成27年度までの５年間,「中学校区学びの連携モデル事業」に取り組んできました。この事業を大きく支えていただいたのが,「岩切学校支援地域本部」の方々です。岩切小・中学校の児童生徒のために様々な支援をしていただいております。家庭と地域が一体となって地域ぐるみで子供を育てる体制が整っています。具体的には，学習支援，地域の行事，ボランティア活動などが挙げられます。その一例として,「ひらめき学習室」があります。「ひらめき学習室」とは，夏休みと冬休みに，中学校の空き教室を利用しての児童生徒の自習室です。ここでは，地域の皆さんがボランティアで指導に当たっています。教科を中心とした学習のほかにも，毛筆や硬筆の指導も受けられます。学校で行われている授業とは，ひと味違った雰囲気の中で，小学生と中学生が共に学び会う機会が設けられています。６年生の児童にとっては，中１ギャップの解消にも一役買っています。

学区紹介　地域とともに

地域とともに学ぶ

古山　洋一（鹿野小学校）

学校は地域の中に存在し，地域と連携しながら教育活動を展開していくことは，学校経営上重要なポイントであることは言うまでもない。本校では，地域と連携して行う活動がいくつかある。

一つ目は，昨年度より，秋から春の開催に時期を変更して行った学区民運動会である。以前から話合いを持ち，地域の方々に，学校の事情を配慮していただいた上での春の開催となった。運動会を開催するに当たっては，体育振興会及び実行委員会の皆様と共に，事前に役員会や実行委員会を開き，当日に向けて連携を図りながらの大会となっている。

二つ目は，地域防災訓練である。昨年度は，10月17日（土）を授業日とし，本校児童が全員参加で，保護者・地域の方々と共に，一時避難所，指定避難所への避難訓練を実施した。避難完了後，地域の方々は消防団の方々を講師とした防災訓練に参加し，子供たちは，教員の指導やボランティアの保護者の支援を受けながら，地域の危険箇所をグループごとに確認し，防災について学ぶことができた。

三つ目は，小中連携事業である。その中に，チーム長町プロジェクトがある。活動のねらいは，長町中学校区の児童生徒が連携して，地域活性化と震災復興に向けた挨拶運動・緑化活動等を行うことにより，地域の一員としての意識を高め，共に助け合おうとする気持ちや態度を育てるものである。まず５月27日の登校時刻に合わせて，長町中学校の実行委員と本校の高学年児童数名で，挨拶運動を行った。また，放課後には，地域の方々の指導の下，国道286号線沿いの歩道前花壇に花を植栽する緑化活動を行い，地域と交流を図ることができた。

さらに，８月には「地域防災を考える」と題して，専門家を講師に迎え，近隣４校の小中学校教職員，保護者や地域の方々の参加と児童生徒の発表を含めた防災フォーラムを開催し，地域防災について共に学ぶ機会を得ることができた。

今年度も，地域と連携を図り，無理をせず，共に学び合いながら，学校経営を進めていければと考えている。

特色ある教育活動

学校の資源を生かした新たな特色ある教育活動づくり

堀江　孝浩（上野山小学校）

１　はじめに

上野山小学校といえば「うさぎ」をイメージする方が多く，特色ある教育活動としての認知度は大変高いと感じています。本校では「うさぎ介在教育」として長年継続して取り組んできており，運営システムや施設もしっかり整っています。しかし停滞感や発展性の課題も感じていました。そこで，新たな上野山小学校の特色ある教育活動を創造できないかと考えたのが，自然体験学習林「楽元の森」でした。

２　楽元の森とは

新体育館建設用地として考えられていたようですが，諸事情により平成17年度に校地に地目替えと学校林として整備されました。校地北側に隣接し，約4000㎡の広さがあります。自然散策やカブトムシの飼育，サツマイモ栽培などで活用していましたが，東日本大震災に伴う放射能問題の影響で活用が困難になりました。

３　楽元の森の活用構想と再整備

再整備に当たり，次のような構想を立てました。

- 野外活動エリア，飼育栽培エリア，自然観察エリアに分けて整備
- 野外活動エリアには，防災活動も考慮してかまどやテント設置が可能になるように整備
- 従来の飼育栽培活動も行えるように整備
- 自然の状態を観察できるような小路の整備

４　活用のための条件整備

整備を進めていくにつれ，楽元の森の持つ教育資源としての可能性は広がりましたが，整備，維持，管理という新たな問題も出てきました。これらの解決には地域の力を借りるよりすべがなく，対応策として，楽元の森を学校施設開放の対象とすることを生涯学習課に認めていただき，地域の施設として位置付けることができました。

５　この２年間での活用の実際

⑴　学校教育において

- サツマイモ栽培と楽元の森での焼き芋会の実施
- 活動場所や観察用小路の整備による観察や自然体験遊び，野外活動の実施
- 野外活動クラブの諸活動
- 卒業記念制作の一環としての粘土づくり

⑵　学校外教育において

- 学びのコミュニティ事業によるデイキャンプ等
- 地域防災訓練時の炊き出し訓練やテント設営訓練
- 社会学級によるお花炭や一斗缶ピザづくりの講座
- 市民センターとの連携事業
- 京都造形芸術大学「子供芸術の村」プロジェクトによる縄文土器づくり
- 上野山児童館や上野山保育所への貸与，活動支援

６　今後の活用・運用計画

⑴　児童会の委員会活動

- 緑化委員会による休み時間のイベントや自由開放
- 飼育委員会によるカブトムシ飼育

⑵　陶器（楽元焼き）づくり

- 焼き窯を作成，楽元の森の粘土を使った一貫した陶器（楽元焼き）づくり
- 地域の陶芸サークルより維持，管理面での協力
- 卒業記念制作や入学記念制作，50周年記念事業などでの記念品制作，子供会や地域での講座等

⑶　ツリーハウス（シンボル）づくり

- 楽元の森に自生しているケヤキの大木を利用しシンボル的なツリーハウスを制作
- 地域の体育振興会より維持，管理面での協力
- ツリーハウスづくりを長期イベント的に実施

⑷　遊具等づくり

- 取り外し式の滑車ロープやブランコ，ベンチなど，楽元の森の自然環境を生かした簡易遊具等づくり
- 地元の体育振興会より維持，管理面での協力

７　おわりに

楽元の森は，学校林として活用できる条件に恵まれています。ここで本校の新たな特色ある教育活動を展開していくためには整備が必要な段階ではありますが，「上野山小学校といえばウサギと楽元の森です」と子供たちが言えるよう，進めていきたいと考えます。また，学校ばかりではなく地域の施設としても広く認知され親しまれる，「新しい公共」の場となれるよう，地域とともに歩みたいと思います。

特色ある教育活動

地域と子供が織りなす終わりなき物語

眞壁　淳一（広瀬小学校）

１　はじめに

平成20年，第43代菊地修治校長のときに国立教育政策研究所より「学力の把握に関する研究」の指定を受け，本校の「生活科・総合的な学習」の研究は始まりました。第44代熊谷和彦校長，第45代河原木美智也校長に研究は受け継がれ，数多くの公開研究会を開催し，授業提供校を引き受け，その成果を発表してきました。今年度は，６月11日，12日に日本生活科・総合的な学習教育学会全国大会において，小学校の部の授業を全学級で提供しました。

２　材の発掘・学級総合

生活科と総合的な学習の研究は今年で９年目を迎えました。子供の興味・関心を出発点として学習課題を設定するために，地域に材を求めます。これまでに発掘してきた学習材や人材はとても充実しています。しかも，同じ学習材でも子供の課題意識の違いによりカリキュラムは多様に変化していき，全く違った学習が展開されます。ですから学習内容は無限に創造されることになります。

子供一人一人に自分事として探究活動を展開させるために，３年前から学級総合に取り組み始めました。担任一人一人が子供と共に一年間のカリキュラムをデザインするには，多くの時間と労力を必要とします。様々な大学からおいでになる講師の先生方から手法を学び，いつも寄り添い，サポートしてくれる「生活・総合コーディネーター」が教師の夢や情熱を支えています。

はじめはゲストティーチャーとして協力することに消極的だった地域の方々も，子供の生き生きと学習する姿や，子供の成長を目の当たりにして，より積極的に関わろうとしてくださるようになりました。地域の学習材やその道の達人の皆様に支えられて，子供たちは終わりのない探究活動を続けています。

３　本物から学ぶ教育

⑴　広瀬川河川敷の木たちへ

長い年月，現役ばりばりで，建物を支え続けてきた「木」。○○先生の依頼で河川敷にやって来て遊具になった。（おつかれさま！）（ありがとう！）

そんな感謝の気持ちとねぎらいの気持ちを抱いて現場から大切に運んで来た。（余生はここでゆったりと過ごしてください）と木に話し掛けました。

⑵　蛍の里への願い

「ここはな，昔たくさん蛍がいたんだけどな，父さんたちが小学生の頃に絶滅しそうだったんだよ。だから友達といろいろ考えて，話し合って，蛍が住みやすい場所になるように一生懸命いろんなことをして頑張った所なんだよ。蛍が今でもこうやっていっぱい飛んでいて，お前に見せてあげられて父さんはとってもうれしいんだ！」と話している何年後かの親子に会いたい。

⑶「ありがとう」

ものを食べるときはよくかむことが大事だってよく言われますよね。でも僕は４，５回かむと飲み込みます。（笑）。昔よく言われました。ご飯を食べるときは，「ありがとう」と６回唱えてから飲み込みなさい！」とね。

生活科や総合的な学習では，周りの人々を笑顔にしたり，幸せにしたりすることを目標にして探究活動を進めていきます。何を知っていて，どう活用し，どのように関わっていくかを問い続けます。地域の達人は，子供の様々な問いに対して本物の技術や真心を教えてくれます。「課題設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」という探究のプロセスに沿って学習を繰り返す過程で，子供は感動を味わい，怒りも覚え，それをバネにして学級の願いを実現するための知恵と行動力を育んでいます。

４　おわりに

御指導をいただいた多くの先生方への御恩返しの意味も込めて，今まで８年掛けて培い，蓄えてきた本校の研究の成果を更に深め，仙台市へ，そして全国へ，今後も発信し続けていくことが，広瀬小学校研究同人の重要な使命ではないかと感じております。

特色ある教育活動

地域とも「和・輪・話」でつながって

岩槻　啓子（通町小学校）

１　はじめに

本校の西南の角には「神子町」と書かれた辻標が建っている。隣接地区に教育機関や医療機関が多く都市型のマンションや復興公営住宅も有しながら，どこか下町の風情を残す寺町・職人の街が通町小学校の地域である。現在は児童数357名。素直で明るい子供たちではあるが，自己肯定感が低かったり，外に向かって積極的に発信する力に課題が見られたりすることも多い。

そこで昨年度より協働型学校評価の目標を「自信を持ち，チャレンジする力を育てよう。」とし，自己肯定感と学力の向上を目指して教育活動を展開してきた。

２　「地の利」を生かして

学校力の向上は学校をけん引する６年生の自覚と自信を醸成していくことが重要であると考え,「あこがれの６年生」に育てるために，たてわり活動を主軸においた特別活動の展開を試みている。

⑴　たてわり地域清掃

震災後の復興プロジェクトを契機に始まった活動を発展させ，日頃地域で支援していただいている場所を中心にたてわりで地域清掃活動を行うこととした。青葉神社・通町公園を初め北山五山の寺社に受け入れていただき地域の特性を実感しながら清掃活動を行っている。

⑵　たてわり遠足

たてわりでの異学年の関わりをより強いものにするために班ごとに目的地を変えてのたてわり遠足を実施している。県庁市役所・広瀬川・メディアテーク・東北大学農学部等がほぼ30分ほどの徒歩圏内にある地域の特性を生かして企画立案している。異学年が手をつなぎ交通量の多い道ながら仲良く出掛け帰校したときには，満足感でいっぱいの笑顔が見られている。そのほか，各教科領域では地域の横山味噌醤油店の支援を受けた味噌造り，四ッ谷用水巡り，北山五山巡り，弟子入り体験と地域の施設や人材を大いに活用した教育活動を展開している。北山市民センターや柏木市民センターのボランティア団体「元気アップ柏木」の方々と共に活動し連携を深めている。

３　地域の「輪」の中で

⑴　スマイルネット通町（地域支援本部）の発足

長年の懸案であった地域支援本部を昨年立ち上げ20名のボランティアの方々が，校外学習・地域清掃・遠足の支援や小１生活学習サポーター等に積極的に参加している。そのほか,防犯ボランティア巡視員・読み聞かせボランティア「お話しぴょんぴょん」，今年発足した父親有志による「おやじの会」の方々が子供たちを温かく支援している。特に今年はおやじの会の声掛けにより「青葉まつり」への参加が実現した。本校は青葉神社境内で私塾として開校したのが始まりとされている。その神社の祭りに参加できたことの意味は大きい。沿道で見守る地域の方々へも元気な子供たちの姿を示すことができた。

⑵　てらまちフェスタ開催

平成26年度から地域の15の関係諸団体がつながり小学校を会場に秋休みに「てらまちフェスタ」が開催されている。事前の数回の話合いを通して地域の様々な団体がつながることが大きな目的であり，市民センター館長や児童館館長が座長を務めながら，よりよい連携の在り方を模索している最中である。平成27年度は「てらまち」らしく参加者全員の座禅体験も初開催された。

４　おわりに

子供たち一人一人が自分のよさを知り，学校の中だけでなく地域の中で輝いてほしいというのが私たちの願いである。保護者地域の方々とより一層「和・輪・話」でつながって，心地よい関係を創り，よりよい子供の姿を目指していきたいと考えている。

特色ある教育活動

「笑顔輝く学校」を目指して

畠山　厚子（鶴谷東小学校）

１　はじめに

本校は,「太陽と緑がいっぱい」をキャッチフレーズに造成した鶴ヶ谷団地東部に位置する。団地が誕生してから50年近くが経過している。住民の高齢化とともに入学児童も漸減し，開校44年目の今年は児童数212名である。平成26年度から全学年単学級の状況が続いている。

２　教育目標を具現化するPTA・地域の協力

本校教育目標「心身共に健康で，自主性，創造性，社会連帯感に富む人間性豊かな児童の育成」を実現するために,「笑顔輝く学校」を合い言葉に「主体的に課題に取り組む児童」や「自己肯定感を味わう児童」を目指す児童像に設定し，日々学校経営に努めている。PTAや地域からの学校への支援・協力は絶大で,学校経営の大きな支えの一つとなっている。以下に一部を紹介する。

⑴　健全育成を目指した取組

昭和48年開校当時から，元気で明るい児童の育成を目指し，様々なスポーツを通して学校・PTA・体育振興会の三者連携で地域づくりに取り組んでいる。運動会は創立時から合同で開催され，今年度は42年目になる。児童数が減少している今，まさに地域の応援や励ましは，児童一人一人の成就感と意欲につながり，自己肯定感に結び付くものとなっている。児童の体力の向上と児童を健やかに育てる意味でも「スポーツ大会」や「持久走大会」などの学校行事への協力・支援，連携は教育目標の具現化に不可欠であると考える。

⑵　下校後の居場所づくり

本校では，放課後の居場所づくりにも取り組んでいる。その一つがさわやか相談室の充実である。さわやか相談員の勤務時間を午後１時30分から４時30分までとし，下校後の子供たちと向き合うようにしている。20名以上の児童が利用し，相談員との会話を楽しみながら宿題・ゲーム・読書など安心できる環境の中で，取り組みたいことやしたいことに没頭している。

⑶　学びのサポート

長期休業中に開催される①毛筆教室，②鈴虫の飼育，③箏や尺八等の地域邦楽コンサートなどにはたくさんの子供たちが参加している。地域ボランティアの方々がこの地域の実態にふさわしい活動を用意し,「主体的に課題に取り組む児童の育成」を支える大きな力になっている。

３　教育目標を具現化する教職員の取組

⑴　震災から学ぶ教育の創造と継承

これからの時代を生き抜く児童には，自ら考え，主体的に活動する力を身に付けさせたい。本校では，児童の自主的活動を推進するため，児童の提案を実現できる学校づくりを目指している。その一つに，４年前から継続している「震災を語り継ぐ会」がある。これは児童自身が震災時の状況を調べ，下学年児童や地域に伝えていく活動である。3.11を風化させてはならないとの児童の強い思いからこの活動が生まれている。児童の主体的な学びを保障する教師の実践は，当時の教職員から確実に引き継がれている。

⑵「分かる楽しさ」を味わわせる学習支援

授業以外に，①個別指導，②定着を目指す一斉学習会，③宿題ができなかった児童対象の朝学習会などの学習支援を実施している。「分かる楽しさ」や「できた喜び」を児童に味わわせていくことは，本校の教育目標の実現にとっては必要不可欠な支援である。少しずつではあるが，子供たちの自信と自己肯定感を育んでいるように思える。

４　おわりに

長年にわたり，子供たちのよりよい姿を目指した地域の地道な活動が途切れることなく続いている。鶴谷中学校区との連携も長い歴史を持つ。

今後も，地域の教育力を学校に取り入れながら地域とともに児童を育ててきた文化を引き継ぎ，学校支援地域本部の設置など，新たな支援体制の確立を図りながら笑顔が輝く学校を目指し取り組みたい。

特色ある教育活動

「チーム鶴巻」を合い言葉に～校内研究の日常化を目指して～

伊藤　敏子（鶴巻小学校）

１　はじめに

本校は，東日本大震災で津波の被害を受けた地域を学区に持つ被災地にある。大きな公園３か所に仮設住宅があり，学校は児童にとって安心して学び遊ぶことができる場所と言っても過言ではない。児童の学力向上だけでなく心のケアも担っている本校教員の役割を果たすためには，児童を見取る力が重要である。しかし，若手教員の割合が高く，学年主任の半数が経験年数10年以下という教員構成が数年続いており，児童の安定した成長には教員の指導力向上が喫緊の課題であった。

平成27年・28年度は，仙台市教育委員会から自主公開校の認定を受け，チーム鶴巻として校内研究に取り組んでいることについて報告する。

２　校内研究の歩み

平成26年度

項　目	内　容
フレナビ鶴巻	経験年数５年以下７人の教員による学び合い
	教育課題発表会での発表 「若手の学校経営参画」
授業づくり訪問	サポート訪問も含め複数回の指導
先進校視察	新宿区立大久保小学校 春日井市立出川小学校

○成果―教員意識の変容

- 学ぶべきことがたくさんあることへの気付き（学習指導要領や解説に立ち返った教材研究）
- 授業改善の必要性

平成27年度　自主公開１年目―研究の土台作り

項　目	内　容
環境整備	全学級，実物投影機・置台・遮光カーテンの設置
鶴巻スタンダード確立	学習環境の整備のためのスタンダード そろえる意識の徹底
外部講師	東北大学堀田龍也先生から指導
先進校視察	米沢市立東部小学校 春日井市立出川小学校
教育センター	延べ50人以上の指導主事による指導
公開校内研究会	平成28年１月29日 全員が授業のために指導主事から指導を受ける 全員が模擬授業・プレ授業の実施

○成果―児童も変容

- 学習環境整備及び鶴巻スタンダードの徹底による安定した学びの姿
- 指導を徹底させる中で，児童を見取る力の向上
- 先進校視察の中で目指す教師像の確認
- 模擬授業の中での指導力向上（OJT）

- 全員授業公開の中で自分事としての授業改善
- 教科書レベルでの教材研究の未熟さへの気付き

平成28年度　自主公開２年目―児童と紡ぐ見通し・習得

項　目	内　容
環境整備	転任者も同じ鶴巻スタンダード
外部講師	東北大学堀田龍也先生から指導
模擬授業	模擬授業・プレ授業の日常化
公開研究会	11月４日　全学級授業公開 ポスターセッションによる研究の成果発表（全員）

３　校内研究を通して

「いつもそうだからできる鶴巻小の当たり前」が児童に身に付いた結果，新年度，担任が替わっても安定した学習を展開している。これは，鶴巻スタンダード児童用・教師用の徹底の必要性を全教員が理解し，日常的に全校で指導するという校内研究の在り方が功を奏したと考える。

４　おわりに

昨年度は，「全員が授業を公開し学び合う本校の校内研究を公開する」という目的で「公開校内研究会」を実施した。本校の地道な日々の取組が，児童の授業への集中度や聞く力を向上させている。その成果は，今年度の運動会でのきびきびとした集団行動，見応えのある全校種目，避難訓練での整然とした行動，校外学習の際の公共交通機関利用の児童の姿にも表れており，これまでの取組の効果を実感している。

教員にとって永遠の課題である指導力向上を目指し，「どこに行っても勝負できる指導力を身に付けてほしい」という願いの下，今年度もチーム鶴巻として奮闘している。

特色ある教育活動

地域とともに歩む学校づくり～「沖野学園」小中連携の取組を通して～

熊谷　敏（沖野東小学校）

１　はじめに

本校は，仙台市の東南部に位置しており，西部は住宅地,三方は田畑に囲まれ自然豊かな地域である。

昭和53年４月沖野地域の宅地化に伴い，仙台市立小学校73番目の学校として沖野小学校から分離，開校した。学区住民の学校に対する期待は大きく,「おらほの学校」という気概の下に夏祭りや学習ボランティアへの参加など，地域を挙げて学校を支援していただいている。また,平成23年度から昨年度まで,学びの連携モデル校として，沖野中・沖野小・沖野東小の３校で「沖野学園」という名称の下，小中連携に取り組んできた。

２　「沖野学園」・小中連携の取組

小学校，中学校が連携を図りながら「９年間で育む子供像」についての共通理解の下，指導の連続性や校種間の円滑な接続を持つことに務めてきた。更に，学校・家庭・地域が一体となった学びや，地域のつながりを生かした学校教育に取り組むことなどを通して，社会的自立の基礎を身に付けた，たくましい児童生徒の育成を目指してきた。

沖野学園教育目標

「　自ら拓く　自分の未来　」

〈９年間で育む子供像〉

「未来に夢を持ち　たくましく生きる　活力のある子供」

〈目指す教師像〉

「使命感と情熱に溢れ　児童・生徒と共に歩む　地域等から信頼される教職員」

〈協働型学園重点目標〉

「育てようかかわり合う力」

「育てよう学びの力」

「育てよう健やかな心と体」

と設定している。具体的な取組についてはそれぞれの委員会で検討を重ね，常に情報の共有を図ることで，課題を洗い出したり，具体的な手立てを考えたりしてきた。

（３校合同の授業研究会）

≪自分づくり委員会の主な取組内容≫

○かかわる力と見つめる力に重点を置き，自己肯定感や自己有用感を高めることを目標とし，合唱コンクールの鑑賞・中学校見学・出前授業等に取り組んできた。

≪学力向上委員会の主な取組内容≫

○９年間を見通した系統的な指導の共有化を図ることを目的とし，学習ルールの検討をし，学習スタンダードの実践と定着を目指してきた。

≪学校生活向上委員会の主な取組内容≫

○基本的生活習慣が身に付いた児童生徒の育成を目指し，小中が連携した挨拶運動を地域関係者やＰＴＡと合同で行ってきた。また，生活状況調査の分析と考察についても検討をしてきた。

≪特別支援教育委員会の主な取組内容≫

○将来の自立を目指した児童生徒の育成をするための一つの手立てとして特別支援教育だよりを発行し，３校交流会では情報の交換を図ってきた。

３　学校支援地域本部（いなごクラブ）の協力

沖野中学校区の児童や生徒に，地域の施設や人材を活用し，学校支援のボランティア活動でお世話いただいている。例をいくつか挙げてみると，小１生活サポーター，縄ない作業，故郷復興プロジェクト七夕飾り作り，昔遊びの会，ミシン点検・ミシンを使ったエプロン作り，稲刈り，読み聞かせ等がある。昨年度沖野東小では，延べ人数で892名の方々に児童活動のサポーターとして御協力いただいた。

（稲刈り作業ボランティア）

４　おわりに

このほかに夏休みには,地域の人材を生かした「沖野学園学びのスクール」を実施し，児童生徒も多数受講している。また，10月には「地域合同防災訓練」に児童生徒が参加し，地域の防災について考えるよい機会になっている。沖野地域内の各団体や施設等にも協力体制が広がってきているため，今後とも小中連携の取組を継続していく意義は大きい。

特色ある教育活動

土曜教育は，やめられない

相澤　経利（郡山小学校）

「沼田さん，この木も燃やしていいの？」
「菊地さん，木登りするから押さえてて！」
「三浦さん，このピザの石窯，誰が作ったの？」

角田の山遊びの一こまです。

この日は，児童111名とおやじの会のメンバー 23名が，大型バスを貸し切り，角田の山に出掛けました。おやじの会の方々が作ったターザンロープやレンジャーロープ，薪割り，丸太切り，木登り，たき火などの遊びを思う存分に楽しみました。お昼は，石窯で焼いた手作りピザや大きなたき火で焼いた焼き芋，おいしい芋煮もおなかいっぱいごちそうになりました。子供たちもおやじの会の方々も，笑顔，笑顔の一日になりました。

郡山小学校は，平成26年度から文部科学省「土曜日の教育支援体制等構築事業」モデル校区（通称：土曜教育）の指定を受け，年間９回のプログラムを実施しています。この事業は，子供たちの土曜日の豊かな教育環境の実現に向けて，地域や企業の協力を得て，「土曜日の教育活動推進プロジェクト」を進めていく事業です。郡山小では，おやじの会，図書室開放事業，ＰＴＡなどが企画し，運営します。児童の参加は自由で，プログラムごとに申し込みます。土曜日を授業日とする「土曜授業」ではありません。

プログラム	内容	企画
スポーツ体験会	野球，バスケ，バレーなどスポーツに親しみます	スポ少
ドロリンピック	休耕田に水を張り，水着で泥遊びをします	おやじの会
夜の学校探検	ゲーム，夜の学校探検をします（例年全校230名中200名参加，宿泊は４生年以上）	おやじの会
角田の山遊び	角田の山にバスで出掛け，思いっきり山遊びをします	おやじの会 図書館開放
楽器づくり	身近な物を使って楽器を作り，演奏に合わせて踊ります	図書館開放
親子スイーツづくり	家庭科室で親子でお菓子の家を作ります	図書館開放
クリスマスページェント	校庭のケヤキの木にクリスマスページェントを飾ります。郡山中吹奏楽部の演奏もあります。	おやじの会
親子味噌づくり	親子で味噌づくりに挑戦します	PTA
卒業スキー	バザーの収益金で６年生を対象にスキー教室をします	おやじの会

土曜教育は，子供たちから大人気です。また，運営側のおやじの会や図書室開放事業の皆さんからも「これまでより活動が大いに活性化した。」「毎回たくさん子供たちが参加してくれてやりがいが増した。」とこちらも大変好評です。更に，保護者アンケートでも，「土曜教育の取組や地域の方々と連携した活動がとてもすばらしいと思います。」「郡山小に入学し，地域で子供を見るというのが本当にできている所だと驚きました。おやじの会の男親ならではのダイナミックな活動はすばらしい取組だと思います。」といったうれしいコメントをたくさんいただきました。３年目を迎え，土曜教育は，児童，地域，保護者にとってなくてならないものとなっています。

いいこと尽くめのような土曜教育ですが，課題もあります。一つ目は，教員の勤務の問題です。企画から実施まで，担当の教頭と教務主任は夜や休日の会議に参加しています。当日は，若い教員も参加していますが，いずれもボランティアです。二つ目は，事業期間終了後の予算措置です。

土曜教育は，郡山小の信頼回復と地域連携に大きな役割を果たしました。参加した教員からも「学校の授業では，できない活動ができて楽しい。」「お父さんたちと一緒に活動ができ，信頼関係が築けた。」との声も聞かれます。この事業を展開・普及させるためには上記課題の解決が不可欠です。課題をクリアできれば，現在，市内各校で展開している学校支援地域本部の発展型として価値ある事業となると考えます。

仙台市小学校教育研究会より

仙台市小学校教育研究会より

仙台市小学校教育研究会　会長　河原木　美智也（立町小学校）

はじめに

本研究会は，仙台市小学校の教育振興のため各研究部会の連絡提携を基に，研究活動の推進を図ることを目的としている。本研究会を構成する22の部会では市内の会員が切磋琢磨しながら教育実践を積み重ね，授業研究を柱に教育研究会を開催している。また，本会のドリル帳編集委員会が「夏休みドリル帳」の編集を行い，仙台市内外の長期休業中の児童の学習に役立たせている。

１　各部会の研究主題と主な研究大会について

国語確かな「ことばの力」を育む魅力ある国語教室の創造～実生活で生きて働く言語活動の充実を通して～。社会自ら社会に参画する資質や能力の基礎を培う社会科学習～思考力・判断力・表現力の育成を通して～。算数算数的活動を通して，数学的な思考力や表現力を育てる指導の工夫。理科科学する楽しさを体感できる子供の育成～実感を伴った理解を目指して～。生活・総合地域の一員として主体的に関わり，共に生きる力を育む生活科・総合的な学習の時間～子供と地域をつなぐ豊かな学びを創出する単元づくり・授業づくりを通して～。音楽分かち合おう！音楽の喜び。図画工作「みる」で輝く子供の世界。家庭未来を創り出す豊かな心と確かな実践力を育む家庭科教育～学びを生かし，自ら生活を豊かに創造する子供の育成～。体育自ら学び，運動の楽しさや喜びを味わえる体育学習を求めて～学習過程の工夫を通して～。書写基礎基本を習得し日常に生かす書写学習～ユニバーサルデザインを取り入れた誰もができる書写指導を通して～。道徳自己を見つめ，共によりよく生きる子供を育てる道徳教育。特別活動集団の一員として目的意識を持ち，自主的に活動する子供を育てる特別活動。学校行事かかわりあい，ささえあう学校行事の創造～豊かな社会性の育成を目指して～。学校図書館豊かな心と学ぶ力を育てる学校図書館の活用～主体的・協働的な学習の推進～。保健自ら進んで健康づくりに取り組む児童の育成を目指して。視聴覚豊かな学びを創る情報活用型授業の展開。学校給食食を大切にする心をはぐくみ，健全な心身を培う食育の推進。特別支援教育主体的に学び，共に輝く子供を育てる特別支援教育のあり方を求めて。生徒指導生きる力を育む生徒指導の在り方～生徒指導の機能を生かした学習活動を通して～。統計教育統計資料を生かして主体的に課題を解決する子供の育成～統計的な見方・考え方が身につく授業づくりをめざして～。外国語活動英語に慣れ親しみ，進んでコミュニケーションを図ろうとする児童の育成。学校事務創り出そう！子供の学びを保障する経営事務を～事務処理の標準を目指して～。

今年度の全国大会・東北大会は，「第69回全国造形教育研究大会宮城大会」が11月10・11日に，「第33回東北地区小学校特別活動研究協議会宮城大会」が11月２日に開催されます。盛会をお祈りしております。

そのほか，仙台市大会を開催する部会は次のとおり。宮城県連合小学校国語教育研究大会，宮城県算数•数学研究大会，宮城県小学校道徳教育研究大会。

２　より一層実りある講演会を目指して

平成14年度から隔年で実施してきた仙小教研・仙中教研合同講演会は，昨年度，「教育文化講演会in仙台」として，平成27年８月３日に開催した。「これからの時代に必要な学びを実現する授業」と題して，東北大学大学院教授の堀田龍也氏に御講演いただいた。仙台市内外から約600名が参加した。分かりやすく好評であった。今年度は，講師にアグネス•チャン氏をお迎えし，「私のターニングポイント」と題して御講演をいただく（平成28年８月19日開催）。

おわりに

今後とも，仙台市小学校教育研究会の充実・発展のため，そして何よりも子供たちのために，子供たちの未来のために，会員一人一人が研修を積み，教師としての指導力を一層高めていく必要がある。

そのためにも，各研究部会の連携・協力をより一層密にし，会員一人一人の専門性と実践力の向上を目指した教育研究会でありたい。

退会者からのメッセージ

後 輩 に 期 待 す る こ と

教育の不易と流行を共有する教職員集団

飯塚　巖（前　桂小学校）

学習指導要領の改訂は約10年サイクルで行われてきた。次期新学習指導要領の策定に向け審議が行われている。学校現場に降りるまではもう少し時間を要するが，情報を早く正しく捉え，動向を教職員に伝えることは大変重要である。特に，道徳と外国語については，この一年が移行期への準備の年になる。学校として大事なのは，地域も含めた実態に即した対応を講じることである。そんなときいつも示唆を与えてくれる言葉が不易と流行である。

どんなに社会が変化しようとも，時代を超えて変わらない価値のあるもの（不易）がある。同時に時代の変化とともに変えていく必要があるもの（流行）に柔軟に対応していくことも，教育に課せられた課題である。子供たちが，将来自己実現を図りながら，変化の激しいこれからの社会を生きていくために必要な資質や能力を身に付けていくためには，学校は組織的，計画的に教育活動を行わなければならない。それを担う教職員は，学校経営への参画意識を持ち，授業力の向上を目指し学び続けることが必要である。授業研究を行わせ，振り返りと改善を図り，内省し自己変革に向かわせ授業力を向上させ，所属感，充実感を持たせることである。教育の不易と流行を共有できる教職員集団を育成し，実態に即して継承できる盤石な経営基盤を築くことを期待する。

集団での学び合いを充実させるために

菊地　道子（前　南吉成小学校）

私は，子供たちが将来を生き抜いていく上で，自ら考える力や根気強く諦めない力，集団の中で協力する力，人との関わりを築く力などが大切だと考えます。具体的には規律ある温かな学年・学級づくりをして集団での学び合いを充実させることを目指して学校経営をしてきました。

集団で学び合うということは，自分の考えを述べたり友達の考えを聞いたりしながら，時には自分の思いを少し我慢して友達の考えを優先したり，互いに折り合いを付けたりして，よりよい考えにまとめていくという活動を行うことになります。一人の学びではなく，集団での学び合いをすることで前述した力が育まれていきます。

しかし，友達の考えを尊重し合える優しい集団で誰もが安心して自分の考えを言い合うことができる集団でなければこのような学び合いはできません。いかにも豊かな発想に満ち，活発に意見交換がなされているようでも，実は一部の意見を強く言える子供だけが活躍しているような集団では，全ての子供に力を付けさせることは難しいでしょう。

だからこそ，規律ある温かな学年・学級づくりを目指すよう指示してきました。その土台があって学習してこそ目指す力を身に付けさせられると考えるからです。

笑顔で元気

及川　節郎（前　寺岡小学校）

この原稿の締切日は３月24日。例年であれば４月以降に依頼があり，退職後の生活や思うことを校長先生方に伝えていたのかもしれませんが……。今日は３月14日。ぼちぼち依頼原稿に手を付けなくてはと思い始めたところ，27年度の校長会研究紀要が届きました。その中に，震災に関わる「次世代の校長へのメッセージ」が掲載されていました。校長が常日頃から肝に銘じておくべきこと，備えたり築いたりしておくべきことが，メッセージとして述べられています。それぞれが震災を体験する中で発した言葉であり，たいへんな重みを感じずにはいられません。新任の校長先生にとっては学校経営の貴重な指針になるに違いありません。私が皆さんに伝えたいことが，そっくりそのままメッセージとして掲載さ

れています。すべて私からのメッセージとして読み替えてもらって，私は一向に構いません。

とは言いながらも一つだけ。校長として過ごした６年間,「笑顔で元気」を合い言葉にして学校経営を進めてきました。これだけで６年間です。が，どんな学校を目指すのか，誰にも分かりやすく伝えることで教職員も児童も地域も同じ方向を向き，力を一つに結集し前に進むことができました。

４月からは「サンデー毎日」。体のメンテナンスをしながら，笑顔で元気な動ける老人になります。

初心を忘れずに

志村　睦雄（前　西山小学校）

学校を取り巻く状況は，ここ数年大きく変化してきています。教員が対応すべき課題は，いじめ・不登校等の生徒指導上の諸課題，学力の向上，ＩＣＴの活用など，多様化・複雑化が進んでいます。このような状況下で注目されてきたのが「チーム学校」という概念でした。教員を中心に，多様な専門性を持つスタッフを学校に配置し，学校の教育力・組織力を向上させ，教員が授業を中心とする教育活動に専念できるようにすることです。

この概念の実現に向けて,「チーム西山」を目指しながら，日々の教育活動に取り組みました。このことは，立場・身分・勤務条件などが違う教職員をどのようにしてまとめていくかということでもありました。このような日々の学校経営のより所となったのが,新任校長研修会の講話で御指導いただいた,「謙虚さを忘れない」「人としての温かさを大切にする」「職員一人ひとりを把握する」「批判には素直に耳を傾ける」「人の心をつかむようにする」などのフレーズでした。

日々の教育活動の中で，悩んだとき，迷ったとき，落ち込んだときなどに，これらのフレーズを思い起こし，初心を忘れないようにしました。今，４年間を振り返ったとき，フレーズ一つ一つの重みを実感するとともに，周囲の人々への感謝の気持ちで一杯です。

校長の仕事とシティズンシップ

菅原　友子（前　中野栄小学校）

昨年の「廣瀬川」で，早坂校長先生のメッセージが心に残りました。校外学習で一緒に歩いて喜ぶ子供は，一個人ではなく校長だからうれしかったと思うという内容でした。確かに，校長には看板の役割もありますが，その裏に子供たちへの強い思いや責任が透けて見えるものです。

毎朝，校門前で子供たちを迎えるのは私にとって楽しい時間でした。一人褒めると止まってくれた車にお辞儀する子が次々増え，挨拶や短い会話で成長を感じることができました。保護者や地域の方からうれしいお話を聞くこともありました。しかし，いじめから立ち直ってやっと登校した子供を迎えた時は，うれしさとすまない気持ちで複雑でした。もっと早く気付いていれば……。

シティズンシップという言葉は市民的資質とも訳されますが，校長に求められる資質に近いものがあります。青少年が現実の地域問題に実際にかかわり，他者のための活動をする中で，考え方や学び方，知識，技術，性行を身に付けていくボランティア学習を「市民教育」(Citizenship Education)と呼び，イギリスでは2002年から学校教育の中で実施されています。日本とは伝統・文化・教育制度の違いもありますが,「地域とともに歩む学校」やActive Learningの学習手法を考えるもとになっています。ただの看板とならないよう，校長としての資質を高めたいものです。

学校や教職員の「力強さと前向きさ」

川村　孝男（前　荒町小学校）

退職後，子供たちと接する機会は極端に少なくなりました。それでも，近所の子供たちが，笑顔で通学するのを見るとほっとします。

新聞に目を向けると,いじめや不登校対応に加え，道徳の教科化など新しい話題であふれています。一つの課題を克服する前に，次々と，新たな課題（問題）が生まれてきます。現場は，いつも緊張感で張り詰めているのだろうなあと思います。

最近，学校や教職員の「力強さと前向きさ」を感じます。指導上，どんなに厳しい中でも，子供たちの成長を信じ，教職員一人一人の「個の力」と，学校という「チーム力」を生かしながら，いつも前に進んでいるからです。そして，その姿を通して，子供たちに勇気や希望も与えています。「現場の先生方は，力強い。学校って，すごい。」と思う毎日です。退職した今，ますます，そんな思いが強くなっています。

校長先生方には，心身の健康に御留意され，苦しいときほど笑顔で，子供たちや教職員の前に立ってほしいと願っています。

最後に，これまで多くの方々に，御指導・御支援いただきました。皆様からいただいた励ましの言葉は，私の支えとなっています。心より感謝申し上げます。

校長先生方に考えていただきたいこと

菊地　博（前　連坊小路小学校）

退職にあたって気懸かりなことを２点記したいと思います。

１点目は「心のケアをよろしく」です。あの東日本大震災から５年が経ちました。復興公営住宅も整備され，被災された方々も入居が進んでいます。そこに伴って起きるのが児童の転校です。何度かの転校を行ううちに，被災家庭の児童であることが分かりにくくなり，心のケアが十分になされなくなってしまう児童が出ないことを祈っております。

２点目は「英語の授業の準備をよろしく」です。英語の授業が目の前に迫っているのに，小学校時報では一度も英語の授業が特集されたことはありませんでした。英語は外国語活動に加えて，「読む」「書く」という活動が加わります。加えて，複数形のsやes,iesなどたくさんの細かくて，例外もある事柄も指導しなければなりません。先日公開の授業でWhat～?の文を尻上りに発音している場面を見ました。これはとても大変なことです。更に「読む，書く」を指導することによって，英語嫌いが出ないようにも気を配っていただければと思います。

今後教育への要求が更に厳しくなることと思いますが，心身の健康に留意されて，校長としてのお力を存分に発揮されることを願っております。

震災の経験を生かす

渡部　定男（前　古城小学校）

私が東日本大震災の経験から二つのことを強く感じたので，学校経営にも生かすようにしました。

一つ目は，特に子供たちに身に付けさせたかった力として，表現力の充実でした。一般に東北人は関西人に比べ遠慮がちで穏やかな傾向があり，子供たちも同様です。先の震災の後に当時勤めていた小学校の６年生が復興支援で神戸市に招待された際，一つだけ指摘されたことは，子供たちのおとなしい様子に，向こうの校長先生から「伝えたいことは相手にきちんと話さないと理解してもらえないんだよ。」と話してくださったことです。

自己存在感を得るには，黙っていても駄目で，それなりに自己主張をしないと埋もれてしまうのが世界共通のことです。校長として取り組んだのは，学年という横の関係が強すぎる現状から，縦の関係を重視した異学年の交流を取り入れました。たてわり活動の設定や異学年で学び合う学習の設定です。上学年は下学年に丁寧に伝え，下学年は上学年の発表を聞くことで，伝える喜び，学ぶ喜び，憧れ，意欲の高揚そして自己存在感を得て，表現力の向上につながりました。

二つ目は命の大切さです。交通事故や震災で亡くなった児童がおり，「なぜあの子が……。」と思うことがあります。防げない事故もありますが，防げる事故もあります。そしていじめ防止も課題です。自他の命を大切にするために防災教育等と道徳の充実に取り組みました。道徳教育推進教師のもと，道徳の授業も活発に行われ，成果もたくさん出ました。また緑化教育に力を入れ，花壇や畑を使って植物を育てさせました。手を抜けば雑草が増えます。手間暇掛けることによって美しい花が咲いたり，作物が実ったりする活動から，子供たちへ命の大切さを教えることができました。そして若い先生方へも子供の教育と相通じることを理解させることができました。

最後になりますが退職間近から退職後の様子です。校長として，退職するその日まで油断ないように先輩から言われておりましたが，やることをやっていれば大丈夫。何があっても慌てずしっかり対処しようと思っておりました。３～４か月の間に三つほど続けて大きな事が出てきました。「やっぱり来たか。」と思いましたが，日頃，地域の人の話を聞いていることが，とても役に立ちました。また，校長としてある程度予想して，すぐに動けるように心積もりをしておくことも有効でした。

４月から児童館に勤め，乳幼児から中高生までの健やかな成長を見守っています。今，児童館の役割が年々増大しています。学校ではできないことを児童館ならできることもいっぱいあります。これからは，更に学校と児童館そして地域が連携をしっかりと保つことが大切であることを強く感じています。

これからの授業に期待したいこと

金子　倫昌（前　長町小学校）

２月に入り，６年生と卒業会食会をしている。校長室のホワイトボードにさりげなく算数の問題を書いておいた。あるグループは最後まで気付かずに会食会が終わった。ところが次のグループは校長室に入ってくるなり問題に気付き「校長先生，この問題をやってもいいですか」と尋ねてきた。一人の子が挑戦し始めると，他の子も関わってきて問題を解こうとしていた。なかなか解決できない。するとそこで子供たち同士の話し合いが始まった。「そこを（　）にしてたせば良いんじゃない」でも答えはでない，「だったらさ，そこを÷にしてから×といいんじゃない」と誤答を生かして新たな計算方法を考え出す。そして答えを見つけ出す。でも全ての答えは見つからない，給食を食べながらなんとか答えを見つけ出そうとしている子供たち。これらの子供たちは，先生から問題を解きなさいと指示されたわけではない。問題を見たときに解いてみたいという思いに駆られたのである。そして，友達の考えや気付きを受け入れながら問題解決に取り組んだのである。

これからの授業で育てていかなければならない力は，このような自ら課題に働き掛け，その解決に向けて主体的に考え判断する能動的な力，他者との学び合いを通して自分を高めていく力だと思う。今後とも授業改善に大いに取り組んでほしいと願う。

「地域とともに歩む学校づくり」を基盤に

髙橋　不二夫（前　長町南小学校）

３年前，前校長から引き継いだ地域防災の成果と課題を頭に入れ，常に「地域とともに歩む学校づくり」を基盤とした学校経営を意識して行ってきた。

顔の見える関係づくりのため，町内会との共催による「学区民運動会」「サマーフェスタ」等，様々な機会を捉え，地域の方々の顔を知り，校長の顔も知ってもらうよう努めた。

また，新たな防災教育モデル校として，小中９年間を見通した目指す姿や防災指導計画を作成した。ここでも，「家族防災会議」や「学区の危険・安全箇所チェック」「たてわり防災集会」など，学校の中だけで防災教育を行うのではなく，絶えず「地域」「家族」「他学年」との関わりを意識した学習を展開するようにしてきた。

今後の課題は，総合防災訓練の在り方である。3.11級の災害を想定した場合，中学校区一斉の訓練が必要になる。大型商業施設や長町駅からの避難者を想定した訓練には，仙台市やＪＲ，商店会，大型商業施設との連携協力が不可決になってくる。「小中連携」をより効率的に進めていかなければならないと考えている。このことを次の校長にしっかりと引き継ぎたいと思う。

是非，会員の皆様も地域を詳細に知り，顔の見える関係を構築し，発災時にはすぐに的確な指示が出せるよう，日々研鑽していただきたい。

最後に，仙台市小学校長会への感謝・御礼とともにますますの御発展，会員の皆様方の御健勝と御活躍を心からお祈りしたい。

子供たちの笑顔のために

狩野　一男（前　東長町小学校）

特に人に言えるような功績を残すこともないまま，教員生活36年が間もなく終わろうとしています。仙台市内ばかり，10校で勤務させていただきました。在職年数とは関係なく，それぞれの勤務校での忘れられない思い出（記憶）が蘇ってきます。初めて教師として歩み始めた新任校，初めて１年生を担任した時のあの新鮮な気持ちを味わった学校。そして，東日本大震災を経験し，数日間校舎内に寝泊まりした学校。

今振り返って見ると，すばらしい同僚の先生方がたくさんいたこと，自分の目標として，追いつこうとその指導法をまねてみたり，共に困難を乗り越えようと汗を流したりしてきた先生方がいたことを，今更ながら思い出されます。

そして，私にとってこれまでの36年間があったのは，子供たちの笑顔です。笑顔が見たくて続けてこられたと言っても過言ではありません。

人は人に支えられ，支える関係になければなりません。「教育は人なり」という言葉を，今改めて考えることがあります。人を育てる大切な営みを誇りとし，育てる難しさと喜びを感じながら，常に前を向き，校長としての重責を果たされることを願っています。これまでお世話になった全ての方々に感謝します。ありがとうございました。

新任校長所感

震災から学び，復興に取り組む学校経営

子供，地域とともに

髙橋　文子（上愛子小学校）

震災時，私は中野栄小学校に勤務していました。３時過ぎには，仙台新港方面から人々が続々と避難してきました。児童と避難民で校庭がごった返していた時，教頭（校長不在）が，児童確認や避難所開設に向けて，教職員や避難して来た方に簡易トイレや毛布の準備をするよう指示を出し，市民センターや町内会の方と連絡を取り合っていました。教職員一人一人は，今やるべきことは何かを考えた行動をとっていました。この時，教職員の組織力とリーダーシップの重要性，地域との日頃の連携の必要性を強く感じました。また，児童のあたりまえの活動が復興の一歩であると信じ，中野小学校との連携を進めました。

この経験から，日頃の協働を基盤に，教職員が非常時の役割を理解し分担に沿った訓練を積むこと，児童がより実践的な知識・技術・態度を系統的に習得する防災教育を展開すること，保護者や地域の信頼を得ながら，双方向の交流活動を進め「顔の見える関係」を保持することを理念として，学校経営を進めていきたいと思います。

地域とともに

高山　典子（実沢小学校）

震災の後，地域の方々が来校し，毎日のように校長室で行われた避難所運営委員会の雰囲気は，その半年前に区のモデルとして行った模擬避難所運営委員会とは比べようがないほど張り詰めていました。地域と学校が連携していることの強さを実感した日々を過ごしました。その後の復興に向けた取組においても，地域との連携が不可欠であることを学んできました。そして，そのリーダーシップをとるのは校長であるということを肝に銘じて着任しました。

本校では，自然災害や防犯に関する判断力や行動力の育成を今年度の努力事項の一つとしています。

先日，その授業を保護者に公開するとともに，学校と地域が一体となって合同防災研修を行いました。地域の大人と共に防災について学ぶことは「自助」「共助」の力を育む上でとてもよい機会となりました。本校の学区は東日本大震災において，深刻な被害をあまり受けなかったということです。だからこそ，地域の方々と共に，手を携えて防災教育にしっかり取り組んでいく所存です。

中野栄小の校長として

鎌田　康彦（中野栄小学校）

本校は，仙台港から直線距離で２kmほどに立地しており，東日本大震災発生時は，学校の近くまで津波が押し寄せ，学区の３分の２が浸水しました。南東側に大型商業施設があることもあり，当初は約3000名が校舎や体育館に避難していたそうです。

その後，校舎が被災した中野小学校が併設となり，閉校となった平成28年３月まで共に教育活動を推進してまいりました。

４月に新任校長として赴任し，学校経営者として重きを置いていることは２点です。まず，閉校となった中野小学校の児童，保護者，地域住民，教職員の「地域への愛情」と「復興への思い」を大切にすることです。特別なことはできないかもしれませんが，いつまでもこの思いは大切にしたいと考えております。次に，津波から児童，保護者，地域住民，そして教職員の命を守るということです。学区内において津波からの避難場所は，高い建物しかありません。このことを踏まえ，町内会をはじめ地域と連携を図り十分な対策を講じ，対処してまいります。

二つの「四郎丸小学校」

白井　剛次（四郎丸小学校）

平成16年10月に発生した中越地震の報道で，長岡市立四郎丸小学校があることを知りました。日本で二つしかない「四郎丸小学校」のために，本校の児童会が中心となって，義援金を全校メッセージと共に送りました。その７年後の平成23年３月には，本校に義援金と全校メッセージが届きました。「今度は私たちが支援する番です」と長岡市立四郎丸小学校からでした。中越地震当時，私は本校に教諭として勤務しており，支援が目的でしたが，「これを機に交流を」とも考えていました。その思いを果たせないままでいました。

結果として，二つの大きな地震が，二つの「四郎丸小学校」が交流するきっかけとなりました。平成23年の10月に，長岡市から30名の児童が復興支援学習の一環として本校を訪れてくれました。その報告を隣の学校で聞き，私は涙が出る思いでいました。現在は，残念ながら直接的な交流は行われていませんが，どんな形でもいいので，また新たな交流ができればと考えています。

編集後記

千年に一度といわれる大震災を経験し，少しずつ復興の歩みも確かになってきたところでありましたが，４月に九州地域の大地震の報に接しました。被害に遭われた皆様には心よりお見舞い申し上げます。今後は自然災害の分析だけでなくいかに教訓としてつないでいくか，また安全教育の側面にとどまらず，まちづくりや自分づくりといった側面での学校教育の役割は実に大きいものがあると再認識しているところです。

本号では「復興に向けた新たな取組を通し，未来を切り開きたくましく生きる子供を育てる学校経営」をテーマに，地域とともに，特色ある教育活動に取り組んでいる学校の実践を御紹介いただきました。また今春，御退職された校長先生方からは，心強いメッセージをお寄せいただくとともに，４名の新任校長先生方からは，学校経営への決意もお寄せいただきました。更に主張，提言や仙台市教育研究会の今年度の取組，英語活動全国大会の実践報告は今後の学校経営に対しまして大きな御教示をいただきました。

最後になりましたが発刊にあたり，御多用の中，玉稿を賜りました皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

（90号担当チーフ　高橋記）

編集担当者：高橋一浩（高森小）　猪股由美子（作並小）　三浦敏光（福岡小）　櫻場直志（黒松小）